

2018年11月11日（日）「次世代への恵みの伝達」

詩篇 78:1-7

0 アサフのマスキール

1 私の民よ。私の教えを耳に入れ、私の口のことばに耳を傾けよ。2 私は、口を開いて、たとえ話を語り、昔からのなぞを物語ろう。3 それは、私たちが聞いて、知っていること、私たちの先祖が語ってくれたこと。4 それを私たちは彼らの子孫に隠さず、後の時代に語りあげよう。主への賛美と御力と、主の行われた奇しいわざとを。5 主はヤコブのうちにさとしを置き、みおしえをイスラエルのうちに定め、私たちの先祖たちに命じて、これをその子らに教えるようにされた。6 後の世代の者、生まれてくる子らが、これを知り、彼らが興り、これをその子らにまた語り告げるため、7 彼らが神に信頼し、神のみわざを忘れず、その仰せを守るためである。

【序論】

今日は「子ども祝福礼拝」に寄せて、詩篇 78 篇から語らせていただきます。この教会にも次世代を担う子どもたちが与えられていることは、主からの大きな祝福です。そして、教会はこの子どもたちを、ただ「かわいい」だけの存在として扱うのではなく、信仰者として養い育てていかななくてはなりません。もう少し柔らかい言い方をすれば、主イエスの許に来ようとしている子どもたちを大人は妨げてはいけないということです。そして、子どもに分かるように、神の恵みとは如何なるものであるかを伝えていく必要があります。その伝達内容は聖書の御言葉そのものにありますが、同時に私たちの経験の中にもあるでしょう。私たちが福音を経験し、福音に生きているのであれば、それを話してあげればよいのです。そして、これは決して難しいことではありません。

【本論】

詩篇 78 篇は実際には 72 節までである大長編で、その内容の大半は旧約イスラエルの歴史の羅列です。使徒 7 章のステパノの説教と似ており、読者には周知の出来事を確認させられているような内容に映ります。しかし、そこには一貫したメッセージが流れていて、イスラエルの不従順と神の赦しが行きつ戻りつ描かれています。今日は 1～7 節を扱いますが、まずはそのような全体像を頭に入れておきましょう。

本論 1. 歴史の表（イスラエルの不従順）

アサフのマスキール（タイトル）

「アサフ」というのは、イスラエルの歴史の中でも屈指の賛美指導者であった人物です（Ⅰ歴代 6:39、Ⅱ歴代 29:30、ネヘミヤ 12:46）。彼はダビデ王に仕え、優れた楽器演奏者であり、ダビデの書いた詩に音楽を付けた名作曲家でもありました。イメージとしては、聖トーマス教会に終生仕えたバッハのような人物でしょうか。バッハは教会専属のカントール（音楽監督）として、年間 50 曲のカンタータを作曲・演奏しました。

「マスキール」とは「熟考の詩」「瞑想の詩」といった意味を持つ言葉であることから¹、読者に教訓を促す内容であることが冒頭で宣言されていると取れるでしょう。「これからあなたがたに語り聞かせることは、必ずしも耳障りのよい内容ではない。しかし、過去の歴史を知り、その中で働き続けておられる神の御業を見よ！」と。

私の民よ。私の教えを耳に入れ、私の口のことばに耳を傾けよ。私は、口を開いて、たとえ話を語り、昔からのなぞを物語ろう。（78:1-2）

「昔からのなぞ」という表現が出てきますが、「なぞ」は「神秘」と訳してもよい言葉です。神の御業は神秘に満ち、人間の知恵をはるかに凌駕しています。9 節以下で語られていく内容は、出エジプトと 40 年に及ぶ荒野の放浪の経験です。神が幾度も大いなる御業をもってイスラエルを救出されるにも拘らず、民は繰り返し不従順に陥る。

民の不従順を表す表現が数え切れないほど出てきます。「神の契約を守らず」「神のおしえにしたがって歩むことを拒み」（10 節）、「多くの奇しいこととを忘れ」（11 節）、「罪を犯し」「逆らった」（17 節）、「試みた」（18 節）、「信ぜず」「信頼しなかった」（22 節）、「罪を犯し」「信じなかった」（32 節）、「神を欺き」「神に偽りを言った」（36 節）、「神に誠実でなく」「神の契約にも忠実でなかった」（37 節）、「神に逆らい」「神を悲しませた」（40 節）、「神を試み」「聖なる方を痛めた」（41 節）、「神を試み」「神に逆らい」「神のさとしを守らず」（56 節）、「裏切り」「それてしまった」（57 節）、「神の怒りを引き起こし」「神のねたみを引き起こした」（58 節）。神の民なら、神に特別に選ばれた敬虔な人々だと思えるのが普通でしょう。しかし、聖書はイスラエルをそのような高貴な民としては示さないのです。むしろ、どこまでも不従順な人間の集団であることが語られている。

私たちはこれをどう読むべきであるか。イスラエルの民を愚かな奴らだと^{わら}嗤うことができるか。むしろ私たちは、彼らのうちに自分自身の姿を見なくてはなりません。「自分の半生、また一週の日にしても、傲慢と不誠実、不忠実の我…」（小畑進）。誰もが同じ失敗を繰り返している人間ではないでしょうか。

¹ 「サーカル」（賢明である、慎重である）という動詞を語根に持つ。

本論 2. 歴史の裏（神の永続的な赦し）

このような民の態度に対して、ご自身の義と聖を表さない神ではありません。怒りと審きの言葉が必ず続いていきます。「激しく怒られた」「火はヤコブにむかって燃え上がり」「怒りもまた、イスラエルに向かって立ち上った」（21 節）、「神の怒りは彼らに向かって燃え上がり」「最もがんじょうな者たちを殺し」「打ちのめされた」（31 節）、「恐怖のうちに、終わらせた」（33 節）、「激しく怒り」「全く捨てられた」（59 節）、「その幕屋を見放し」「敵の手にゆだねられた」（61 節）、「激しく怒られた」「火はその若い男たちを食い尽くし」「その若い女たちは婚姻の歌を歌わなかった」（63 節）、「その祭司たちは剣に倒れ」「やもめたちは泣き悲しむこともできなかった」（64 節）。神は聖なる方でありますから、罪を審かずに置くことはおできにならないのです。このことは私たちにも思い当たるところがあるのではないのでしょうか。人間は罪を犯しておいて、何事もなく生きていくことはできません。たとえそれが誰の目にもバレなかったとしても、心が病巣となります。罪を隠し持つ人間はどこか平安がなく、あるいは開き直って生きていくようになるでしょう。地上で隠し続けた罪を終わりの日まで持ち越してはなりません。

イスラエルの歴史のもう一つの側面（「歴史の裏」と言ってもよいでしょう）には「神の恵み」があります。人に裏切られ、反逆された神は、審きを下さないことはできないのですが、その怒りをいつまでもそのままにしておかれる方ではなく、常に赦しへと向かわれるのです。次に、神の忍耐と赦しの表現を拾い上げてみましょう。「あわれみ深い神は、彼らの咎を赦して、滅ぼさず、幾度も怒りを抑え、憤りのすべてをかき立てられはしなかった」（38 節）、「そのとき主は眠りから目をさまされた。ぶどう酒に酔った勇士がさめたように。その敵を打ち退け、彼らに永遠のそしりを与えられた。それで、ヨセフの天幕を捨て、エフライム族をお選びにならず、ユダ族を選び、主が愛されたシオンの山を、選ばれた。主はその聖所を、高い天のように、ご自分が永遠に基を据えた堅い地のように、お建てになった。主はまた、しもベダビデを選び、羊のおりから彼を召し、乳を飲ませる雌羊の番から彼を連れて来て、御民ヤコブとご自分のものであるイスラエルを牧するようにされた。彼は、正しい心で彼らを牧し、英知の手で彼らを導いた。」（65-72 節）

この詩篇は以上の聖句で終わっています。結論として語られていることは、赦しであり、希望なのです。「民の罪 → 審き → 赦し」というパターンは、とりわけ士師記に見られる傾向ではありますが、イスラエル史全体を表してもいるでしょう。そして、敷衍して考えるならば、これはキリスト教史にも連綿として流れているテーマであり、私たち個人の人生にもミニチュアのように見られるものと言えます。

本論3. 親たる者よ、失敗と赦しの経験を我が子に語れ

主はヤコブのうちにさとしを置き、みおしえをイスラエルのうちに定め、私たちの先祖たちに命じて、これをその子らに教えるようにされた。後の世代の者、生まれてくる子らが、これを知り、彼らが興り、これをその子らにまた語り告げるため、彼らが神に信頼し、神のみわざを忘れず、その仰せを守るためである。(78:5-7)

ここで「子孫」に関する言及が出てきます。「その子らに教えるように」「後の世代の者、生まれてくる子らが、これを知り」「これをその子らにまた語り告げるため」。要するに、神の赦しを永続的に子孫に語り告げなければならないということです。神の恵みは一世代で途切れてしまってはなりません。私たちが自らの罪に気づき、大いなる赦しを味わい知るときに、それを我が子に伝達していくことができるのです。

親たる者は子どもに上から福音を押し付けるのではなく、自らへりくだり、自分の失敗を認め、語り、罪がどのように審かれ、そして赦されたかを伝えていく必要があるのです。これは勇気の要ることかも知れません。しかし、大人が正義を振りかざすのではなく、自分も罪人の一人であり、赦しを必要としている人間であることを低い心で語っていくならば、子どもたちは安心し、罪を告白することができるようになるでしょう。罪が隠され続けているところには、赦しの恵みは現れないのです。

それを私たちは彼らの子孫に隠さず、後の時代に語り告げよう。主への賛美と御力と、主の行われた奇しいわざとを。(78:4)

78 篇全体で語られている内容は、イスラエルの民の「恥の歴史」です。しかし、詩人は自分をその歴史を形成する一人に数えながら、その恥を隠しませんでした。この詩篇が世の終わりまで語り継がれる可能性があったとしても。

私たちの生き方はどうでしょうか。過去の恥すべき失敗は隠しておきたいというのが、すべての人間の感覚であると思います。しかし、(何でもかんでも人前で話せばよいということではありませんが) 神の御前ではすべてを白日の下に晒しましょう。そして、光とされた闇は、時が来ると人に話せるようになることが多いのです。それは、十分に人の心が癒された時かも知れません。焦らず、その日が来ることを待ち望みたいと思います。人は救われるとオープンになっていくといいます。すべてのことが益に変えられるからです。

私たちキリスト者が子孫に伝達していくべきことは、アサフが言っていることと同様、自分がどれほどの罪を赦された存在であるかということです。自分の人生を覆っていた闇と、それをはるかに超える神の赦しの両面を語るのであります。

【結論】

子ども祝福礼拝に寄せて、詩篇 78 篇を味わいました。私たちが願うところは、今日祝福を受けた子どもたちが神の御前に罪を告白することから逃げない人生を歩めるようになること。それは、神の恵み深さを知らなくてはできないことです。私たちが誰一人として罪を犯さずには生きられない存在であるならば、そのような私たちを十二分に知った上で尚も永遠に赦し続けてくださる主に、この人生をお委ねせずにはられないのです。

【祈り】

憐れみ深い天の父なる神様。私たち人間は失敗を繰り返しながら、この人生を、この歴史を築き上げています。神の民の歴史とは、人類史の縮図そのものです。しかし、その反逆が如何に留まることがなくとも、あなたは審きの後に必ず赦しの恵みを用意しておられました。私たちも悔い改め、罪を告白するときに、すべてが光とされることを信じます。そして、あなたの恵み深さを後の世代に伝達します。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

旧約イスラエルの反逆を審き、同時に幾度となく赦しの恵みに至らせ給うた、父なる神の愛。

十字架で永遠の赦しを確立し、自らの罪を告白する者を豊かに受け入れ給う、主イエス・キリストの恵み。

神の憐れみ深さを、後の世代に、代々に語り伝えさせ給う、聖霊の親しき交わりが、あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。